

綿矢りさ『インストール』論

—朝子とチャット—

黒田翔大

(日本文化学専門/博士後期課程)

1.はじめに

『インストール』は、2001年に第38回文藝賞を受賞した綿矢りさのデビュー作である。綿矢は作品に関してインタビューにおいて次のように語っている。

「朝子は初めは砂を噛むような思いで毎日を過ごしている。そして登校拒否をして、ようやく自由の時間を手に入れるんですけど、自分なりの規律を見出していく。ちょっと脱線して、自分から元に戻っていくことで、自分の日常を、まあそんなに悪くないって捉えられるような主人公を書きたいと思いました。それからチャットという素材も魅力的でした」¹

綿矢は「ちょっと脱線して、自分から元に戻っていくこと」を書こうとし、その際に「チャットという素材も魅力的」だと考え取り入れている。主人公である野田朝子の高校生活という日常からの離脱先がコンピュータによるチャットと設定されているわけだが、それに関して榎沢健は次のように述べている。

ネットを介した関係を通じて、子どもと大人、小学生と高校生のあいだに横たわる上下関係・序列関係・力関係が崩れ、もはや意味をなさなくなる瞬間に直面した朝子は、驚きとともにある種の「解放感」をおぼえるのである。

こうした「解放感」の背後には学校への嫌悪が横たわっていることを見逃してはならない。それはたとえば性別役割言語による男と女の固定した関係、さらに学校・学年に基づく先輩・後輩といった上下関係・序列関係を理不尽なまでに日々再生産しつづけている学校への嫌悪である。²

朝子は小学生のかずよしにコンピュータの操作などを教わるが、高校生と小学生という関係性がコンピュータに対する理解という点では逆転している。さらに、コンピュータでのチャットにおいてはあらゆる社会的関係性から「解放」される。そのため、高校生や小学生といった

¹ 「著者インタビュー「インストール」綿矢りさ」(『文学界』2002年、2月)、p. 297。

² 榎沢健「教える子ども—綿矢りさ『インストール』再読—」(『神奈川大学評論』2004年7月)、p. 122。

社会的な位置というのは消失し得るのである。このようなチャットの特性が作品内で機能しているのである。

もっとも、作中に描かれているチャットは既にやや時代性を感じさせるものではある。しかし、現代におけるケータイなどの電子機器による文字の通信の優位を考慮すると、チャットに関しても目を向ける必要があるだろう。そこで本稿は、『インストール』の朝子とチャットに注目して分析を行っていく。

2. 「コンピューター」のインストール

朝子は「私、毎日みんなと同じ、こんな生活続けていいのかなあ」などと考えている。そんなある日、クラスメイトの光一から次のように言われる。

「まあもし疲れてるんなら、一回学校休んで休養とったら？ あんた今まで無遅刻無欠勤だから知らないと思うけど、人が働いている時に休むと、皆が休んでいる時に一緒に休むのより二倍充実した一日が送れるよ。なんとなく焦るから自由時間の密度が濃くなるんだ。」

「休みたいけど、一回休んだら、次の日も、また次の日も、また次の日も学校行けなくなる気がする。」

「いいじゃない休みたいだけ休んだら。さては、あんたあの母親にビビってるんだね。大丈夫、おれがナツコに言ってあんたが欠席中なのをあの怖い母さんの耳に入れさせないようにしてあげる。」³

朝子は「休みたいだけ休んだら」と提案される。懸案事項として母に知られてしまうということが挙げられるが、それは光一が担任の先生であるナツコに対して黙っておくように指示するため解決するため、朝子は光一の言ったことを受け入れる。そして、母に隠れて登校拒否を実行することになった朝子は、部屋にあるものを全て処分しようとする。現状のままでは「廃人になってしまうのではないか」と恐怖を感じた朝子は、「全部捨てなければ!」という衝動に掻き立てられ「大掃除」をするのである。そうして、朝子は部屋の中を空っぽにしようとしていく。

しかし、部屋にある学習机やピアノといったあらゆるものを何の未練もなく捨てていくものの、コンピュータに対しては戸惑いを抱く。このコンピュータは以前おじいちゃんからプレゼントされたものだった。

結局夕方までかかって、私はやっと部屋にある全ての家具と小物をゴミ捨て場に運び終えた。あと部屋に残るのは学習机とピアノ、この二つは後で業者に連絡して運び出してもらうとして、最後に残ったこのコンピューターを捨てる勇気が出ない。この機械は両親の離婚がやっと決まった六年前に、おじいちゃんが買ってくれた思い出深い品物だ。大阪に

³ 綿矢りさ『インストール』河出文庫、2005年、pp. 12-13。

※以後、本稿では書名と頁数のみを記載する。

住んでいるおじいちゃんと埼玉に住んでいる私は、このコンピューターを使ってEメールを交換しあう約束をした。しかし当時小六の私は、コンピューターと電話回線を繋ぐのさえスムーズにできず四苦八苦、私と同じ機種のコピーコンピューターを持つおじいちゃんもカタカナだらけの説明書にてこずって愚図愚図、そんな二人、ついにEメールを一度も交換できぬままにおじいちゃん天国へ逝ってしまった。

おじいちゃんの死後も私はコンピューターに搭載されているEメールおよびインターネットの機能を使えるようになるろうと引き続き努力したが、失敗。無闇にいじくりまわしたでいでエラー発生表示ばかり点滅するようになってしまったこの機械はもはや廃品だ。でも、おじいちゃんが孫のためならと大枚はたいて買ってくれたこのコンピューター(中略)申し訳なくて捨てるに捨てられない。⁴

コンピュータは「おじいちゃんが買ってくれた思い出深い品物」であった。離れた場所に住んでいる朝子とおじいちゃんが、コミュニケーションを行うために導入されたものであった。しかし、結局はコンピュータの操作の理解が不十分であったため、Eメールでのやりとりが行われることは一度も無かった。そのような代物であるので、朝子はコンピュータを捨てることには逡巡するのである。

そこで、朝子はとりあえずコンピュータの起動を試みようとする。

長い時間迷っていたが、埒があかないので、とりあえずコンピューターの電源を入れてみた。軽く錆をこするようひきつり音が内部から聞こえ、画面に弱々しい白い光がヴンと灯り、機械が目覚める。(中略)しかしやっと画面にアイコンが並んだと思ったその瞬間、いきなり白衣を来た男のイラストが画面中央で微笑み、それを合図に星が落ちるような音と共に、光が突然画面から消えた。それきり、コンピューターは完全に沈黙。慌てて電源ボタンを何度も押す、が状態はなにも変わらず、画面はがらんどうに暗いままである。おじいちゃんコンピューター昇天、してしまつたらしい。合掌。私は機械に向かって手を合わせた。ごめんなさい。私はコンピューターもおじいちゃんも好きなように振り回すだけで、彼らのもろさを認めようとしなかった。

動かなくなったものを部屋に置いたままにしておくのはつらいので、やはりもう捨てるしまおうとやけっぱちに決意し、私はコンピューターを持ち上げた。それは、ずんと息が詰まるほどに重く、腰に電気が走った。⁵

コンピュータが壊れてしまったので、朝子はそれを捨てる決心が着く。もっとも、朝子にとってコンピュータは壊れていようがまいが、既に何ら意味を持つ物ではない。先ほど触れたように、もともとこのコンピュータは「おじいちゃんが自分への関心を蘇らせようと苦肉の策で私に買い与えた」ものである。つまり、朝子とおじいちゃんがコミュニケーションを取るためと意味付けられていたコンピュータなのである。おじいちゃんは既に亡くなっておりコミュニケーションを取ることは不可能なため、コンピュータが「おじいちゃんのコピーコンピューター」

⁴ 『インストール』、pp. 17-18。

⁵ 『インストール』、pp. 19-20。

である限りもはや機能し得ない。

そのコンピュータに新たな生命を与えることになるのは小学生のかずよしである。朝子はコンピュータを含めて処分するものをマンションのゴミ捨て場へと運んだ際に、同じマンションの住人であるかずよしと出会うことになる。かずよしは朝子の扇風機や MD ウォークマンには目を向けませんが、コンピュータに興味を示す。

「このコンピューター買ってでもいいですか?」

私は驚いて言った。

「それ? それはもう死んでるからダメ。ね、そんなのよりこれどう MD ウォークマン。豪華でしょびっくりしたでしょ、しかもねあのね、これ無料であげる。だって実は私この周りにある物全部捨てるつもりだったから。」

子供は、コンピューターに触れた。

「これ故障してるんですか?」

「多分。さっき久しぶりに電源入れたら、すぐ画面の明かりが消えた」

「うーん。でもやっぱり、これ欲しいなあ。」

「それはね、」私は粘った。(中略)

私は大きく口を開けてまた反論しようとしたが、そのときふっとこのおじいちゃんのコンピューターが昔のように快活にキュインキュイン起動している姿が目の前に浮かんだので、あ、それはめでたい、

「本当に直せるのなら差し上げます。」⁶

そして、かずよしは家に持ち帰りコンピュータを操作するが、「ケーブルつなげたら普通にすぐ起動」したというように、壊れていたわけではなかった。かずよしは、インストールし直してコンピュータを使用可能な状態に復元するのである。

それによって、コンピュータは新たな意味付けをなされる。今までは朝子のおじいちゃんとの関係性で意味付けられていたが、かずよしの手に渡ることにより別物へと生まれ変わることになる。そして、この新しいコンピュータは朝子にとって今までと異なる世界を見せてくれるのである。

3.朝子のインストール

朝子は「自称変わり者」であり、「毎日みんなと同じ、こんな生活続けてていいのかなあ」などと無駄なことを日々あれこれと考えている。そんな朝子に対して光一は「一体自分をどれだけ特別だと思ってるんだ努力もせず時間だけそんな惜しんで、大体あんたにや人生の目標がない」と批判を浴びせる。もっとも、光一の指摘を受けるまでもなく、朝子はそのことを自覚している。

まだお酒も飲めない車も乗れない、ついでにセックスも体験していない処女の十七歳の

⁶ 『インストール』、pp. 27-28。

心に巣食う、この何者にもなれないという枯れた悟りは何だというのだろう。歌手になりたいわけじゃない作家になりたいわけじゃない、でも中学生の頃には確実に両手に握り締めることができていた私のあらゆる可能性の芽が、気付いたらごそと減っていて、このまま小さくまとまった人生を送るのかもしれないと思うとどうにも苦しい。もう十七歳だと焦る気持ちと、まだ十七歳だと安心する気持ちが交差する。この苦しさを乗り越えるには、分かっている、必要なのは、もちろんこんなふうにごみ捨て場へ逃げ出すのではなく、前進。(中略)しかし、やっぱり私は動けなかった。自分にほとんど呆れ、仰向けになってさびれたコンクリートの四角の切れはしからのぞいている暮れかけの空を見上げる。⁷

朝子は社会の中で自身が大した位置にはいないのだと強く感じている。成長するにつれて現実が徐々に見えて来るようになり、高校生であることや十七歳であることに對して息苦しさを抱くようになっていく。そのため、朝子はかずよしによって修復されたコンピュータを見て、「あーあ、私もコンピューター買おうかなあ。電腦の世界に飛び込めば人生の目標やら生きがいやらを見つけられるかもしれないし」と言う。朝子はコンピュータの世界に現実とは異なる世界があるのだというように考えているのである。確かにメディアが作り出す空間は対面における状況とは大きく異なっており、それに関してジョシュア・メイロウィッツは次のように述べている。

電子メディアもさまざまであり、それぞれに異なる表出の手がかりを伝達している。たとえばラジオは音声的表出しか伝えない。声の出し方をうまく操ることのできる人たちは——たとえ他の表出を同時にコントロールすることができなくても——このメディアを非常に効果的に使うことができるかもしれない。神経質な話し手は、自分の声をコントロールすることはできるかもしれないが、神経質に脚が震えたり身体が揺れたりするのをコントロールすることはできないかもしれない。ラジオは印刷よりも人の内奥をうかがわせるが、ラジオはまだ視覚的な表出の手がかりの有効なフィルターになっているのである。

8

対面の状況下であれば、相手に伝達される表出は様々でありその制御を行うことは非常に難しい。言葉だけでなく、声の抑揚や身体の動きまでもが相手の目に映るからである。しかし、メディアを介していれば伝達される表出は制限され、その制御も比較的容易となる。例えば、電話によるダイヤル Q2 といったサービスはそれを端的に示している⁹。電話は声によるコミュニケーションであるので、性別や年齢といった自己に関する情報を偽ることが対面と比べてはるかに容易である。それは、コンピュータによる文字のコミュニケーションであれば顕著である。

そのような特性がコンピュータにはあるわけだが、かずよしは朝子に対して「働くってのはどうですか? 僕と組んで、働く」と提案してくる。

⁷ 『インストール』、p. 24。

⁸ ジョシュア・メイロウィッツ『場所感の喪失——電子メディアが社会的行動に及ぼす影響——』上巻、新曜社、2003年、p. 212。

⁹ 富田英典『声のオデッセイ』恒星社厚生閣、1994年。

「フウゾクなんですよ。」 子供が独り言のように言った。

「チャットっていうインターネット上のシステムを使って男の人と、文字でエッチな会話をするっていうのがこの仕事の内容なんだけど、こういうのもテレクラ嬢と同じでチャット嬢って呼ぶのかなあ。」

子供は他人事のようにぼんやりとつぶやく。私は呆れて言った。

「私に紹介してくれる職業ってフウゾクだったの!？」

子供はきまり悪げにうなづく。¹⁰

アルバイトの内容は、時給 1500 円で「コケティッシュチャット館」というサイトで風俗嬢の雅の代わりにチャット嬢を勤めるというものである。朝子はチャット嬢というのにやや抵抗を感じるものの興味を抱く。このアルバイト情報をどこから入手したかという、かずよしのメル友からの依頼であった。

ハロー——かなこさん元気? 毎度おなじみみやびです。今、子供と一緒にアンパンマン見ながらメール書いてんの。安らぐわあ。

それであの、突然なんだけど、かなこさん、私の代わりに風俗のバイトやってくれない? いきなりでビックリ? まあ風俗っていてもいつも私がやってる本番のやつじゃなくて、チャットでHな会話するだけの、しかも土日まるまつ休みのすごく軽いバイトなんだけどーどうかな?(中略)かなこさん、あなただって子供の世話大変なのは私百も承知だけど、頼むから私のふりいて店のHPでチャットしてくれない? びっくり? とりあえず返事ちょうだいね。¹¹

かずよしは自身を専業主婦のかなこだと偽って雅とメールを交換しており、その雅からアルバイトを頼まれることになる。それを引き受けた朝子は、チャットの世界では 26 歳の雅という名の風俗嬢であり、高校生や 17 歳といった現実の社会的な制約からは一旦離れることになる。そうすることで、朝子は「電腦の世界」へと入っていくのである。

4.チャットによるコミュニケーション

アーヴィング・ゴッフマンは社交における女主人を例として、コミュニケーションの進行における責任に関して次のように述べている。

相互行為に向ける意識を生む原因は、相互行為が「うまくゆく」べく個人がもっている特別の責任に関連している。特別の責任とは、その場にいる人たちから適切なかわり合いを引き出す責任である。こうして、小さな社交の集まりで、女性の主人は客たちのなかに入って行って、客たちの会話に自分からかわってゆくことが求められる。だから、会

¹⁰ 『インストール』、p. 60。

¹¹ 『インストール』、pp. 63-64。

話がうまく進まない、だれよりも彼女がその責任を負わされることになる。結果、彼女は、そのときの社交のあり方や、その夜のパーティーがどう全体として進行するかを気に使いすぎて、彼女自身はパーティーを楽しむどころではなくなってしまう。¹²

女主人は積極的に働きかけることで、パーティーの参加者の会話をスムーズに進めさせなければならない。会話の円滑さを守る責任が女主人にあるのである。このような責任は、チャットで客をもてなす側である雅を演じる朝子が負うものである。客がチャットによる満足を十分に得ることができなければ、その責任は朝子へと向けられてしまうのである。実際、朝子は日本語変換の仕方が分からずキーボード入力をしてしまった時に、「なんか言ってよ、ねえ」や「は!? 意味分かん!」というように客から非難を受けてしまっている。そのため、朝子はチャットのコミュニケーションの特性や規則を理解しなければ、十分な働きをすることができないのである。

それでは、チャットによるコミュニケーションとはどのようなものであるのだろうか。チャットはオンライン上で文字のやりとりを行うものであるが、それに関してポール・レヴィンソンは次のように述べている。

オンラインコミュニケーション・コミュニケーションとしてのサイバースペースの電子メール、グループ・ディスカッション、デジタル・テキストなどは、どんな基準からいっても、史上類を見ないほど完全にインタラクティブなメディアであり、紙に固定された活字よりもはるかに短命で未完成で広範で高速なメディアだ。だから、オンラインのテキストはこの上なくクールで、その温度は絶対零度に近い。¹³

レヴィンソンはオンライン上の文字を「この上なくクール、その温度は絶対零度に近い」と指摘している。オンライン上の文字はその送信者の表出が限りなく制限されている。文字から想像や推測をする必要があり、非常にインタラクティブなものなのである。

このように、チャットは対面とは大きく異なるコミュニケーションの場を形成する。そのため、チャットでのコミュニケーションには独特な規則が存在することになる。朝子は客とのチャットをする中で、そのことに気付いてくる。

「チャットは順調ですか?」と私を見て聞いた。私は押入れから出した脚をぶらつかせながら自信満々に言った。

「順調。チャットのコツ、分かってきた。あんたが初めに教えてくれたように、やっぱ会話のリズムとか画面に文字を乗せるタイミングとかが一番大事だね。特にチャットセックスする時にはね。長い文を作ろうとせず、きゃつとか、ああんとかそういう短い返事をどれだけテンポ良く画面に乗せるか、そこがミソだな。あと『そんな大きい入らない』とか『ここ噛んでっ』なんていうあまりにも本物のセックスに近づきすぎている台詞はウケないということも学んだよ。客は、肌と肌のぶつかり合う本当のセックスを疑似体験

¹² アーヴィング・ゴッフマン『儀礼としての相互行為』法政大学出版、2002年、pp. 122-123。

¹³ ポール・レヴィンソン『デジタル・マクルーハン——情報の千年紀へ——』NTT出版、2000年、pp. 184-185。

したいわけじゃなく、あくまでチャットでのセックスをしたがってるのである。だから無理に二人抱き合っているという高度な妄想の世界を造ろうとするより、「今までみやびそんなやらしい言葉を返されたことなかったよ」とか「興奮しすぎちゃって今パンツびしょぬれ、みたいに、画面の向こうでもだえている雅、を想像できる言葉を使った方がウケる。」¹⁴

朝子はチャットにおける会話を円滑に行うために、「短い返事をどれだけテンポ良く画面に乗せるか、そこがミソだな」ということを学んでいる。チャットでは長文での返信は客の反応が悪い。会話のようにテンポよく文字を入力することが重要であり、それに伴って短文での返信となる。また、「画面の向こうでもだえている雅、を想像できる言葉を使った方がウケる」というように、相手の想像力を喚起させるような文字を打つことが肝要である。現実のものをそのままチャットで行えば良いというものでは決してなく、チャットには特有の世界があるのである。

5.チャットと現実

朝子はチャットの感覚を掴み、アルバイトを順調にこなしていく。しかし、コンピュータによるチャットでのやりとりはオンライン上で完結するものだとは限らない。それは常に現実世界との関係性を持っており、多かれ少なかれチャットの客はそのことを意識しているからである。

明>雅さんは本当に結婚してるの？

みやび>うん！ 子どももいるのー

明>いいね。俺、雅さんみたいな人妻を犯してみたいな。

みやび>じゃあお店に来てよう

明>店東京にあるんでしょ？ 無理、俺は神戸に住んでるんだから。となると、もうなんだか虚しいね。

さよなら、もう落ちるよ。

落ちる、というのはチャット利用者が最もよく使う用語の一つで退室するという意味のネット専門用語だ。チャットをやめ、そのチャットルームのページから出る、という意味として使われている。初め私は何がどこからどこへ落ちるのかななどと考えて混乱するばかりだったけれど、何回かその言葉に出くわすうちにいつも会話の最後に用いられていることに気づき、なるほど落ちるは「帰る」の意味だ、と分かった。人が仮想から現実へ落ちてゆくのだ。¹⁵

「雅さんみたいな人妻を犯してみたいな」と言う客に対して、朝子は「じゃあお店に来てよう」と返事をする。雅の勤めている風俗店に行くことが可能な地域に在住しているのであれ

¹⁴ 『インストール』、pp. 88-89。

¹⁵ 『インストール』、pp. 85-86。

ば問題ない。しかし、遠く離れた場所に住んでいたら、会いに行くことは難しい。現実に出会うことが困難であることを意識すると、「もうなんだか虚しいね」と客はチャットを止めてしまう。

朝子はチャットのアルバイトをすることで、自己を偽り様々な人々と触れ合う機会を得ることになる。チャットという空間は現実の社会的な制約から離れることができるため、日常では接点を持たないような人々と遭遇することが出来るのである。しかし、チャットにおいても現実を全く意識しないというわけではない。雅と会ったことのない客は、年齢や人妻であることを聞くなど、現実の情報を知ろうとしている。また、聖璽という客には「お前ひとりっこだらう、友達少ないだらう、処女だらう、的確に当てていき、そして最終的に彼は、私が高校生ということまで見抜いてしまった」というように朝子の正体を見抜かれてしまう。客は詮索を行い、また朝子の情報はオンライン上の文字とはいえ少なからず伝達され得てしまうのである。かずよしは「やっぱり文字だけのつながりと思って騙していても、鋭い人には、性別とかバレてしまうんですね」と言うように、チャットの世界と現実世界は完全に分離されているというわけではない。それにも関わらず、チャットの世界を現実から独立しているかのように振る舞うことに対して朝子は虚しさを覚えてしまうのである。

しかし、その虚しいという経験は決して無駄だったということの意味しない。学校に行かずチャットをして様々な他者と遭遇することは、朝子が自身を見つめ直すきっかけにもなり得ていた。

「あんた、青木夫人に『僕男の子の赤ちゃん欲しいな』って言えるようになった？」
とかずよしに聞くと、彼は、それはなあとごまかしてコンピューターの前に向き直った。
「努力しなさいよ。私も学校に行くから。何も変わってないけど。」
かずよしは驚いた顔をして私を見つめ、そのまま、おめでとうと言った。そしてしばらく複雑な表情でコンピューターの画面を見つめていたが、ふと思いついたように言った。
「そうだ、親にバレる前にこの現金を品物に代えちゃいませんか。」
かずよしはキーを叩き始めた。
「ネットのオークションで何か買うとか。あつタイムマシンなんていうのがオークションに出ていますよ、九万円。」
「また変なロマン追いかけてる。ね、それより机とか扇風機とかバガボンドとか売ってない？」
私は強い光を放っている画面を覗き込んだ。¹⁶

チャットのアルバイト終了後、朝子はかずよしに向かって「努力しなさいよ。私も学校行くから。何も変わってないけど」と言う。朝子にとってチャットを通して得た経験は、再び現実の世界で生きていこうという姿勢へと繋がっているのである。

6.おわりに

¹⁶ 『インストール』、pp. 133-134。

朝子は高校生活に嫌気が差し登校拒否をする。そしてチャットを行うようになるが、客の相手をするに虚しさを感じる。客は現実逃避をしてチャットをしているが、そのような客の態度は滑稽であるからだ。もっとも朝子自身の行為も虚しいものであるため、元の世界へと戻ろうとする。このように、チャットを用いたコンピュータの空間は、現実逃避だけではなく現実を意識させることにも繋がっているのである。